

村、新在家十三ヶ村、所謂毘沙門町、大門町、中院町、川端村、立石造道池裏村、小瀬村、仙翁寺村、山本村、往生院村、新在家十三ヶ村、小瀬村、觀空寺村の百姓、各かはるゝに篝火を焼き、鉢をうち念佛を唱ふ暮六ツ時半時に至れば、大覺寺御門跡の前には列し、火消役は過半、大門の階上に登る。是大門非常の備にあつる所、又本堂の方に來りて、をのをも居ならび、其體嚴重にこれを備ふ。其後常磐村の西なる中野村といへる穢多の者七人來る。其内之魁首たる者一人、烏帽子素襖を著して、炬火の圍に立、刻限に至ば、此穢多の者、火を燃すて藁に下燃し、竿頭に付て、大炬火の上より落すと等しく、此火竹の葉杉葉にもえ付、大炬に移りて、次第に炎熾んなり。其餘二本の炬も亦斯の如くして、三本等しに移りて、堂の横軒端に倒し、消絶のごとく限り逼とす。

古今著聞集釋二教湛空上人、嵯峨の二尊院にて、涅槃會をおこなはれける時、人々五十二種の供物をそなへけるに、花をうへにたて、歌をよみて付けるに、西音法師、水瓶に櫻を立ておくるとてよみける。

返し 湛雲上人

又一首をそへられける

闇路をばみだのひかりにまかせつ、春のなかばの月はいりにき

會をてらすひかりのもとをたづぬれば勢至ほきつのかめ

圖諸會國年中行事大成二下花盛閻魔堂大念佛千本の北引接寺に於て勤之此法會開次第開闢ありて十ヶ日の間(申略)一説云千本の念佛は二月中旬涅槃會昔行はれしなり應永十五年三月八日後小松帝北山義滿公の御所へ行幸の事あり此時當寺普賢像の櫻名木の由御沙汰あり將軍家より斯波治部大輔義重を使とし明年より花の盛に念佛を執行すべしと上意あり則糧米五十石を賜ふと云々其式毎年堂前の普賢像の櫻开花を期として寺僧一枝を折て是を用京兆尹に獻る即米三石五斗を賜ふ是を以七ヶ日法會の料とし堂前に於て俳優をなす其技王生念佛嵯念佛の扮戯に等く其様各假面を被り堂前舞臺の上に於て俳優をなす壬生寺の俳優は無言にして手技を以て其態を知らしむ當寺は言を發して技をなせり今十ヶ日の間これを勤む

慶應三年正月〔吹塵錄三十五回〕皇室追加御所御賄向其外凡取調書略○中

千本念佛料

一米三石

是は前同斷